



府中かんきょう 市民の会

NPO法人
府中かんきょう市民の会会報
2026年冬号1月21日(水)発行
通巻100号
発行人 浅田多津子
編集人 葛西 利武
(府中市市民活動センター・プラット登録団体)



会報100号(2026年冬号)発行記念に向けて

浅田多津子



当会設立26年となり、四季報として年4回発行してきた会報も、今回で100号となりました。

地域に根差した環境保全活動の紹介、その時々の担当者の熱意がこもった文章、協働して頂いた農工大関係者の方々や一般の方々からの寄稿も多くあり、皆様のよりよい環境を求める「汗の結晶」が凝縮して描かれてきたと思っております。この場をお借りしてお礼申し上げます。



2013年秋号(10月)が50号でした。それから12年の年月が経ち、前編集長:館浩道氏から現在に至っては現編集長:葛西利武氏が51号から100号発行を担当しています。

紙面構成や写真の配置などを考えいかに読みやすく伝えるか、最後まで誤字・脱字にも留意しながら発行まで行き着いたことを思うと心勞さえうかがえます。今後も当会の発展とともに歩んで頂くことを望みます。



101号(春号)以降についても、当会全員の想いが届くよう、会報はプラット含む市内公共施設に設置、Hpやインスタグラムに投稿しながら、多くの方々に当会の環境保全活動が伝わりますようにいたします。

今後ともご理解、ご協力の程宜しくお願ひいたします。



当会のシンボルロゴ

大地から樹が伸びて、大気が雲に変化して雨を降らせる。雨はまた大地に戻って、緑を育てる。環境の「水・緑・大気」の三大要素をイメージ。

「記念誌」発行 会報100号発行にあたり

NPO法人府中かんきょう市民の会
理事長 浅田多津子

会員の熱意がこもった活動やよりよい環境を求める「汗の結晶」を一緒に見ることができるようにと、会報創刊号から通巻No.100までの内容をまとめた本記念誌を発行しました。歴代の編集長はじめ、携わった執筆者の方々、ご協力いただいた様々な団体の方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。

2026年1月21日

会報100号発行に際して、元理事長で現相談役の竹内章氏から過去の当会の輝かしい業績を記録に残していただきました。「記念誌」はA4サイズ両面カラー印刷で、全7枚です。ちなみに、100号発行までは、季刊ですから25年を要します。

歴代の会長・理事長(発行人)

- (1)会長 横山永望／2001年7月11日～
- (2)理事長 大崎清見／2003年7月9日～
- (3) " 進藤禮治郎／2006年4月12日～
- (4) " 竹内章／2008年7月9日～

※(2)からはNPO法人を取得したため「理事長」

- (5)理事長 梅沢みどり／2017年4月12日～
- (6) " 小西信生／2018年7月11日～
- (7) " 浅田多津子／2024年5月10日～

☆編集長 館 浩道(2号～50号)／葛西利武(51号～100号)

自然環境体験学習 第2回講座

昆虫観察と昆虫の種類

赤澤賢軌(ゲンキ)

昆虫の奥深さ

調査を担当いたしました東京農工大学昆虫研究会1年の赤澤と申します。私は物心がついたころから昆虫が大好きな人間の一人です。昆虫を分類することから始め、今では昆虫の生き様も調べるようになりましたが、昆虫は奥が深くなかなか飽きることはあります。

さて、今回の調査では28種の昆虫を確認できました。ここでは目(もく)という分類をするための言葉が登場します。あまり聞きなれない言葉ですが、これを機に昆虫に詳しくなるぞ!という意気込みでどうかお付き合いください。

非常に大雑把で不足した説明となります。例えはカブトムシはコウチュウ目に振り分けられます。コウチュウ目はカブトムシの他にクワガタやゲンゴロウ、テントウムシなどが含まれるカテゴリーで、これらは互いに似ている仲間として分類されます。なお、目という分類をさらに細分化していくと科(か)、属(ぞく)という下位の分類があります。一方で昆虫綱や動物界など大まかな分類も存在します。このように生物を分類するためには様々なカテゴリーが存在するということです。

28種を観察

では、以下に本調査で得られた種類を列挙します。

- ・オオアオイトンボ、アオモンイトンボ、ギンヤンマ、アキアカネ(写真掲載)、コノシメトンボ(写真掲載)、ショウジョウトンボ、ウスバキトンボ、シオカラトンボ、以上トンボ目8種
- ・ハサミムシ、ヒゲジロハサミムシ、以上ハサミムシ目2種。
- ・オンブバッタ、マダラバッタ、エンマコオロギ、以上バッタ目3種。
- ・アブラゼミ、ミンミンゼミ、ニイニイゼミ(羽化殻のみ)、ツクツクボウシ、ヨコヅナサシガメ、キマダラカメムシ、チュウゴクアミガサハゴロモ、以上カメムシ目7種。
- ・クロナガアリ、クロヤマアリ、クロオオアリ、アミメアリ、以上ハチ目4種。
- ・ウスバカゲロウ、以上アミメカゲロウ目1種。
- ・ナミアゲハ、アオスジアゲハ、アカボシゴマダラ、以上チョウ目3種。



アキアカネ

自然への理解と解像度が増す

昆虫が少なくなる時期のため、これまでの調査と比べると種数の観点では劣ります。一方で、アキアカネなど赤トンボの仲間やエンマコオロギといった府中ではこの時期にしか成虫を見ることのできない昆虫を確認することができましたね。



コノシメトンボ

調査ではトンボの仲間を最もよく観察できました。私は日本庭園エリアでとても早く飛び回るギンヤンマが印象的です。ギンヤンマの雄は池に一定空間の縄張りをもつていて同じ軌道を回り続ける習性があります。そのため、飛来する軌道を先読みしてギンヤンマを虫取り網で捕えることができるお話をしましたね。実際に調査では子供たちがギンヤンマや同様に非常に早く飛ぶウスバキトンボを採集してくれて、喜ぶ様子を見ることができ、私自身も大満足でした。

生き物の種類を細かく分類できる、加えて、彼らの暮らしぶりをよく知ることで、自然への理解は深まります。今回の調査を通して、少しでも自然への解像度が増したと感じていただけたら幸いです。

昆虫観察 39名参加(2025年9月21日)

9月21日午前9時30分から約2時間、自然環境体験学習の第2講座「昆虫観察」が都立府中の森公園で行われました。同講座は、府中市受託事業として府中かんきょう市民の会が年4回実施しており、21日は、小学生・保護者14組28名、東京農工大学昆虫研究会、市環境政策課、市民の会メンバーの計39名が参加しました。

当時は、ハチを見た時の注意があったあと、昆虫研の加賀美さん(同大学院生)と赤澤さんの解説による、昆虫観察が始まりました。小学生や保護者から、虫の名前や特徴について次々出された質問に対して、昆虫研の皆さんから虫をめぐる自然環境の変化も含め丁寧な説明がありました。子どもと保護者、参加者間の会話もはずみ、楽しく、成果の多い観察会となりました。(村崎啓二)

自然環境体験学習(昆虫観察)
都立府中の森公園にて

自然環境体験学習
第3回講座

「里芋と大根の収穫」

鈴木淳佑

2025年11月9日(日) 9:30~11:00、農園塾及び隣接の府中町公会堂にて第3回講座が実施されました。小学生13組26名が参加し、講座は主に公会堂内にて行い、収穫時に農園塾圃場内に移動し収穫体験を行いました。

土と循環の話

収穫の前に、隣接する府中町公会堂にて「土」についてのお話をしました。

第1回講座のマイクロプラスチック、第2回講座の昆虫観察を振り返りながら、今回のテーマである植物もまた「土」と深く関わっていることを確認しました。

土のなかには“分解者”と呼ばれる数多くの土壤生物が暮らしており、彼らの働きによって肥沃な土壤が生まれ、植物が育ち、虫や人がその恵みをいただく——そして排泄物や死骸が再び分解者の餌となり循環していく。こうした「いのちのつながり」について説明し、実際に土壤生物であるシロテンハナムグリの幼虫を観察・触察しました。

参加者の中には昆虫にとても詳しい“昆虫博士”的な子もいて、先生の代わりに幼虫の知識を周囲に教えてくれる姿が印象的でした。

里芋と大根の話

じゃがいもやさつまいもの収穫を経験したことがある子は多くいましたが、里芋は初めてという参加者ばかりでした。そのため、里芋がどのように育ち、どんな葉をつけるのかという基本的なところから学びました。

傘になりそうなほど大きな葉は水を弾く構造になっていること、土の中で親芋・小芋・孫芋が固まって育つことをクイズ形式で紹介すると、子どもたちは興味津々。

特に『となりのトトロ』でトトロが雨の中で傘として使っていたのが里芋の葉だと知ると大喜びで、実際に葉を手にトトロになりきる姿も見られました。

大根については、大根の仲間の野菜の特徴や、部位によって適した調理法等も紹介しました。普段スーパーではあまり見かけない“葉付き大根”を手にしたことで、「葉っぱも全部食べられる」という新たな発見をしたご家庭もあったようです。

収穫

当日早朝に降った雨で畑がぬかるんでしまったため、里芋の収穫と仕分けは農園塾生とスタッフが事前に行いました。

参加者の皆さんには、2種類の大根(白大根と紅大根)の収穫を体験していただきました。

塾生の指導を受けながら、1人ずつ大根を引き抜きます。なかなか抜けない大根に苦戦しながら、その大きさと重さに満足げな笑顔があふれました。

また、又割れになっていたり、人形のようなユニークな形の大根はスーパーではほとんど見られず、1本1本違う形をした大根に驚く声も上がっていました。

終わりに: 開催に至るまでの苦労話

今年度の農園塾で行う自然環境体験学習は、昨年の「さつまいもの植え付け・収穫」から内容を一新し、里芋と大根の収穫をテーマとしました。秋の収穫に合わせ、里芋は5月に植え付け、大根は9月に種まきを行いましたが、今年の夏は酷暑と長期の少雨が続き、栽培管理には非常に苦労しました。

多湿を好む里芋には、水やりを欠かさず行い、草を敷いて乾燥を防ぎました。大根は気温が下がって雨が降らないと種まきができないため、天候を見極めつつ、農園塾生の尽力により無事に収穫まで育てることができました。長く厳しい夏の間、管理作業を続けてくださった農園塾スタッフの皆さんに心より感謝申し上げます。

また、隣接する桶久保公園が長期工事中で会場確保に苦労したほか、予定日の10月26日は大雨予報のため延期、振替日の11月9日も小雨予報という状況でしたが、会員の皆さまの柔軟な対応とご協力により、無事開催することができました。この場を借りて深くお礼申し上げます。



みんなで考えよう！ 私たちの暮らし「水環境」

浅田多津子

水環境の保全に向けて：合成洗剤、プラスチック等の化学物質による環境・人への汚染を知る

府中市環境保全活動センター事業「府中かんきょう塾2025」第4講座／高田秀重講師

令和7年8月30日(土)14時～16時 参加者34人 府中駅北第二庁舎3階会議室にて

「府中かんきょう塾2025」は全8回の講座を計画し、「水環境」に関わる第4講座を当会が担当した。下水排水の現状と環境や人への影響、様々な汚染の実態を日々研究されている高田秀重講師から学んだ。

講座内容は、下段QRコード府中市環境保全活動センターHPより見ることができる。

＜開催報告＞「かんきょう塾ネット」と「当会」のコラボ企画

講師は東京農工大学名誉教授 高田秀重氏、総合司会は当会 浅田多津子理事長



熱弁を振るわれる高田秀重講師

塾生からのアンケート結果内容(抜粋)報告

『プラスチック』についての感想が多く寄せられた。①プラスチックを使わないようにするのが一番ということがよくわかった。②ポリマー微細化による添加物の曝露の問題を改めて理解した。③プラスチックの悪さ加減は理解したが、今回いただいた対策は植物繊維を着る、陶器ガラスを容器として使うなど物足りなく感じた。④マイクロプラスチックに含まれる添加物が人間に対しての影響に付いては認識してなかったので再確認したが、それに対する画期的な対応策がないものかと思われた。⑤具体的なデータを元に説明して頂けたのでとてもわかりやすかった。「講師の方の実際の生活上でのこだわりも聞け、えらい先生の話でありつつも同じ生活者の話として捉えることができた。友人などに共有したい内容だなと思った」と講話内容に惹かれた感想もあった。

☆

さらに、講座を聴いてほぼ全員が「よく理解できた」と回答。①分かり易く多くのデータ調査の講話。②ポリマー微細化による添加物の曝露の問題を改めて理解した。③プラスチックの有害性がよく理解できた。④人体リスクを知れた。⑤自分自身の仕事がプラスチックに関する仕事のため、どのように環境関わっていくべきか、あらたに向き合う良いきっかけになった。⑥根拠が示されてかつ生活に密着した提案まで提示されており、やる気にさせ

られた。⑦プラスチック製品や合成洗剤を使用するときの意識が変わった。2025年度から府中市環境審議会委員としてご活躍されている高田秀重講師に大いに期待が寄せられた。

肝心なのは、学んだ後の行動変革が求められる

①本講義内容を行政やメディアへの情報共有化を協力に推進してほしい。②本講義のエッセンスを学校教材に！③市民球場の人工芝化は問題だと思う。今からでも中止をしてもらいたい。④今回の講義の内容には今更ながら驚いた事象もあったが、それに対する世界的な対応策はないのかが気になった。

【第8回最終講座】2026年1月24日(土)午後1時～4時 塾生によるグループ活動発表、交流会、修了式 同会場にて塾生が数チームとなって、第3次環境基本計画から気になる項目について深堀するグループ発表でも「水環境」について調べているグループがあると聞く。この第4回講座がそのきっかけとなったなら嬉しい。



⑤講座の司会進行は当会浅田(右端奥の玉柄シャツ)。その左の立ち姿は高田講師

※講座の内容は、環境保全活動センターHP
よりご覧ください⇒



府中環境まつり 2025

2題

2025年10月5日(日)11時～16時 「けやき並木通り」にて開催

環境まつり実行委員&当会担当 浅田多津子

来場者数、14,000人

2023年度まで府中公園で行われてきた環境まつり。2024年度は農業まつりと一緒にけやき並木通りで行い、今年度は環境まつり単独開催とした。台風の影響で前日まで雨が降り好天を望みながら当日を迎えた。

出展数は39団体と昨年度より多い。来場者数も昨年度の環境まつり単独数よりのべ3,000人ほど増え、計のべ14,000人と集計した。

当会ブースの来場者数も昨年度の1.5倍の計443人(小学生160人、大人283人)。農園塾の活動紹介、湧水調査活動、小学校の環境学習や有機フッ素化合物(PFAS)汚染問題を取り上げたパネルを展示。

落ち葉を堆肥化した土の中の生きものに关心を持つ子ども達。棕櫚の葉で作る「シュロバッタ」は毎回親子連れに大人気で今回も最後まで絶えず、事前用意と合わせ140個すべてを差し上げた。

よりよい環境をめざし、
まちづくりの一端を担う

フォーリス前には大きなステージが設置され賑わいを増した。「クイズラリー」のエコ景品はすべて配布されちょうど16時でコーナー終了。

「クイズラリー」アンケート結果からは、通りがかりの来場者も多かったが、滞在時間は長いように見受けられた。脱炭素やエネルギー問題、循環型社会など、一人



当会ブース前にて↑
シュロバッタづくりの菊池さん→

ひとりにとってより良い環境を目指すまちづくりの一端を担うまつりとなつたならば大成功である。

★「西府崖線保全活動チーム」インスタに、当日の準備風景と活動の様子を投稿。
(担当:野口)



「かんきょう」というレンズを通して見る！！ 鈴木淳佑



「府中農園塾」リーダーの鈴木さん

腐葉土に棲む生き物クイズや
紙芝居や絵本の読み聞かせ担当

当会のブースにて、府中町農園塾の活動紹介や、収穫した唐辛子の吊るし飾り展示のほか、バイオネストから採取した腐葉土に棲む生き物クイズ、土壤を豊かにする生き物を題材にした紙芝居や絵本の読み聞かせの担当をしました。

腐葉土に興味を持って寄ってくれた子どもたちは「何がいるんだろう？」と夢中になって小さな生き物たちを探し、それらの分解者と呼ばれる生き物たちが土壤を肥やし、野菜を育むつながりを感じ取るきっかけとなりました。

当会の活動がすべて土壤環境に根ざした
共通のテーマであると再認識

私自身は主に、農を通じた社会貢献活動に関わっていますが、展示を通して改めて農園塾や西府崖線湧水調査、PFAS問題など、当会の活動がすべて土壤環境に根ざした共通のテーマであると再認識しました。今後は、これらの活動をより有機的に結び付け、来場者に自然と人のつながりを認識し、環境について意識を高めながら伝えられる場を目指したいと思いました。

府中市立「府中第五小学校」の環境学習

小西信生

～活動9年の軌跡～

きっかけ

2017年当時の小学校側から打診があったことが、はじまりでした。後でわかったことですが、2016年までは多摩川での「府中水辺の学校」に3年生が参加していたのですが、水辺の学校側の事業縮小により、当会に依頼がきたものでした。特別の事件や事故が発生したのではなく、水辺の学校側の高齢化によるものだと説明されたそうです。

五小とその周辺に住む会員が多いことも、「地域との連携」との目的からも、学校側からの連携理由と言えるでしょう。現在も、各小学校では「地域連携事業」を、市民協働で行なうことはテーマの一つとされていますが、十分に連携している事例はまだ少ないようです。

2017年の開催経緯と、その後

2017年の開催は、3年生全員を対象とし、2学期1回で実施しました。最初に、環境学習開催のお話があったのが、1学期になってからだったこと、小学校の多摩川水辺の学校の開催も、それまでは年1回だったことなどによります。

2018年度以降は、フィールドワークをそれぞれ1、2、3学期に1回開催する方式に変更し、現在に至っています。オリエンテーションは、1学期のフィールドワーク開始前に、グループ分けをするためもあり、2017以来毎年実施しています。

フィールドワークでの学習内容は、小学校とその周辺での自然観察という範囲として、1・2学期は樹木、野草、昆虫の3グループに分けて行うこととし、1・2学期それぞれで、季節による変化がどのように起きているかを観察し、現在に至っています。

3学期は、愛鳥モデル校に指定されていることもあり、バードウォッチングとしています。また、学区内の西府崖線には西府町湧水があり、各学期に訪れて、全児童が生き物以外を観察する体勢をとっています。湧水はその性質上水温が比較的安定しており、夏は冷たく感じる湧水が、冬は暖かく感じられる現象も、毎年体感できています。

パンデミック時の対応

2020年に起きたパンデミックの影響は、環境学習にもありました。一旦は中止も検討しましたが、小学校は学級閉鎖もなく、通常に開校していたこともあり、それまで体育館で行なっていた、オリエンテーションをクラス別に4回に分けて実施することや、会員はマスクを必ずつけるなどの対応策をとって実施することができました。

直近の体勢

3年生はスタート時から4クラスであり、現在も同様です。各クラスごとに1～2時間目、3～4時間目を使って2日間かけて実施しています。雨天の日は延期になります。これまでも雨で2回延期し、予備日に延期したことがありました。

当会の実施体勢は樹木・野草・昆虫で会員がそれぞれ2人ずつがつき、PTAから保護者が各班に1～2人ついて、交通安全などに留意する体勢をとっています。担任の先生も子どもたちの学習状況を随時見てまわることにしています。

2年前からは、仲よし学級の児童もフィールドワークに参加しています。

長続きした理由

五小ではスタート時から9年連続で続き、今後も続けていきたいと考えていますが、続けてこられた理由は、まず、小学校側の協力体制、当会側のメンバーのほとんどが健康でいられたこと、双方が継続の意思があったことによります。

なお、次面に活動の写真8枚を掲載しています。

府中市立 府中第五小学校校長 松下雄太先生より、会報100号記念に際してお祝いの言葉をいただきました。

府中かんきょう市民の会 様

この度、府中かんきょう市民の会会報が100号を迎えたこと、心よりお祝い申し上げます。また、長年にわたり、地域の自然環境を守り育てる活動を続けてこられた皆様に、深く敬意を表します。

本校では毎年、3年生が総合的な学習の時間にフィールドワークを行い、府中かんきょう市民の会の皆様にご指導をいただいています。子供たちは、自然の中で多様な生き物や植物に触れ、地域の環境の豊かさを実感しています。

活動中には、いつも見逃してしまう動植物に気付き、「こんなに花が咲いている」「五小の周りにはたくさん自然があつて楽しい」と感動していました。体験が確かな意識の変化につながっていることを感じます。

皆様の温かいご支援と、長年にわたる地域への貢献に心から感謝申し上げます。この貴重な学びを通して子供たちが自然を大切に思う心を育み、持続可能な社会の担い手として未来へとつないでいくことを願っております。

結びに、会の今後の更なるご発展をお祈り申し上げます。

府中市立府中第五小学校
校長 松下 雄太



落ち葉銀行の継続を求める「要望書」を、高野市長に提出

10月31日付で「落ち葉の銀行」の今後のあり方について環境政策課に要望書を提出し、会を代表した6名が11/10に高野市長と面談し直接要望した。

市は緑のリサイクルを積極的に進めるため、市民との協働により長年実施してきた「落ち葉の銀行」参加団体数は、2017年度34団体が2024年度には19団体と回収量も腐葉土配布量も減少している。環境政策課のみで進めるには限界があると考え、公園緑地課や小・中学校、農業者などと連携し全庁的な取り組みとし、『落ち葉の資源化』を進める施策とすることを求めた。



⑤右から3人目が高野市長、その左が要望書を手渡す当会浅田理事長
 (2025年11月10日)
 ⑥西府町緑地での落ち葉清掃活動

会報100号発行に思う

編集人／葛西利武

頭の片隅に

私は61歳で離職。離職後は、連れ合いと趣味の登山、スキー+温泉三昧を考えていた。しかしながら、長年頭の片隅にあったボランティア活動にも挑戦してみようと思っていた。

Tさんと援農者宅へ

丁度そのおり、府中市の広報紙で「援農ボランティア」募集を知り、Tさん(元会員)を通して活動に加わったのが2010年7月である。Tさんと大國魂神社前で待ち合わせ、押立町の援農者宅へ自転車を漕いだ。その3か月後の10月に、「NPO法人府中かんきょう市民の会」に入会した。その後、間もなく「西府崖線保全活動チーム」が発足したので参加した。

前編集長、館さんからアドバイス

西府新チームの立ち上げに際して、広報活動が必要となり、私がビラづくりを担当することとなった。ビラづくりを引受けたはよいがうまくゆかず思案にくれていた。そのため、会報編集長・館浩道さんに聞いてみることとした。

早速、館さんからの助言により、専用ソフト(ラベルマイティ)を手に入れ、パソコンも買い替えた。しかし、ソフトの動かし方がわからずゼロからの出発だった。館さんには随分初步的な質問をあびせた。それらのQ&Aをすべてメモして練習に励んだ。

偶然、節目で「51」

西府崖線保全活動のビラ創刊は2011年11月1日である。それから約2年間「ハケ・用水・わき水通信」のビラ作りと、「会報」作りの手伝いをしてきた。このような経緯のなか、館さんが会報50号(2013年10月9日)という大きな節目に退任となり、51号(2014年1月8日)から新編集長という大役を引き受けことになった(右上に51号1面上部写真)。

あの日からあつという間に12年半が経過し、会報が今回で100号となった。また、「ハケ・用水・わき水通信」も現在51号の発行である(右下にNo.51の1面上部写真)。ここに、偶然「51」という数字が並んだ。

編集人の実情

私は館さんのように環境問題に精通しているわけではない。編集長としての資質に自問するところもあるが、引き受けた以上は刻苦勉励の心境である。もちろん、編集作業には面白く魅力的な部分があるが、一方では地味で黒子のような役割もある。執筆者の原稿がそのまま使えば楽である。しかし、ときには文章に手を入れ、アドバイスをしたりする。

また、なにかの事情で原稿が手にはいらないときは、自分で書くしかないこともある。さらに、〆切日を過ぎた原稿には昼夜兼行の突貫作業が強いられることがある。

府中かんきょう市民の会

<http://f-env.sakura.ne.jp>

NPO法人 府中かんきょう市民の会毎月報

2014年 冬号 1月8日発行 通巻51号

発行人:竹内 章(府中市分梅町)

TEL 042-364-3428

盛況だった「田んぼの学校2013」



①開校式・田植え(5/26) ②草とり・生き物探し(7/6) ③稲刈り・ハサかけ(9/28) ④脱穀・粒搗き(10/12) ⑤収穫祭・修了式(11/17) の第8回田んぼの学校の全行程が盛況裏に終了。昨年の経験をふまえて、「田んぼの学校2014」の計画がそろそろ視野にはいってくるところである。写真左は①の田植えの様子。右は③の赤ちゃんを背負ったお母さんの稲刈りの様子。2面(脱穀・粒搗き)、3面(収穫祭・修了式)に開道記事あり。

多摩川はオモシロイ

~身近な自然と水辺の環境~

TOSHIBA

多摩川ナチュラル

真。しかし、日本でも45年前の多摩川は白色だつた。その泡が東横線電

①「会報」通巻51号(2014年1月8日) / ②「ハケ・用水・わき水通信」No.51(2025年3月1日)

西府崖線/水と緑の回廊

☆題字の樹木イラストは、環境の三大要素「水・緑・大気」をイメージ

ハケ・用水・わき水通信

NPO法人 府中かんきょう市民の会
発行 2025年3月1日(土) No.51
編集人 葛西利武 Tel.090-5564-5838
HP <http://f-env.sakura.ne.jp>
府中市市民活動センター・プラットフォーム

冬の野鳥観察会(2025年1月18日)

寄稿/佐藤智恵子 田中香代子
ありきれいな黄緑色です。一方、ウグイスは茶褐色です。一般的によく目にする色名の「ウグイス色」に近いのは、メジロのほうだつたりするので、ややこしいですね。

今後も、野鳥が見られますように

上空を白いサギが4羽ほど南から北へ飛んでいくのが見えました。川は南のどこへ行くのか興味深いです。白いサギは、ダイサギ、チュウサギ、コサギなどいますが、チュウサギは田んぼに多くこの辺にはいない(東京では準絶滅危惧II類VU)そうなので、ダイサギかコサギとのことです。

湧水辺りから西は、オナガ(⑩写真)がたくさん来て騒がしく飛び回っていて、キジバト、カラマツ以外の

当会「会報」はハイレベル

会報は年4回発行の季刊である。ここに作業の大体の流れを示す。原稿集め→版下原稿作成→印刷所に発注→会報発行→市内各施設への配架依頼と定例会配布→HPに掲載。したがって、読者に見える部分はおもに配布の時だけであるが、編集者はほとんど一年中関わっているようなものだ。根気がないと続かない作業である。

この会報は、質(記事の内容)、量(主に8ページ)ともに高いレベルであると自負している。この水準を維持できるかについては、常にプレッシャーを感じている。

NPO法人、「自由度」高し

最後になったが「NPO法人」は住み心地がよい。私は民間企業と公務員職場を経験しているが、そこにはない「自由度」がある。ある先輩から、「ここでは言い出しちゃ」がやるんだよと言わされた。まったくその通りで、私は「言い出しちゃ」が多いので、樹木ネームプレートを取り付け(最盛期80枚ほど)、巣箱取り付け(最大8個ほど)、カラー図版を3種類作成しいずれも版を重ねた。そのうちA3サイズ三つ折りの「ハケマップ」は4版を重ねたが、2026年2月頃には5版の発行予定だ。

そして、「ハケ・用水・わき水通信」も創刊した。活動の要諦は、「遊び心」ではなかろうか。